追悼

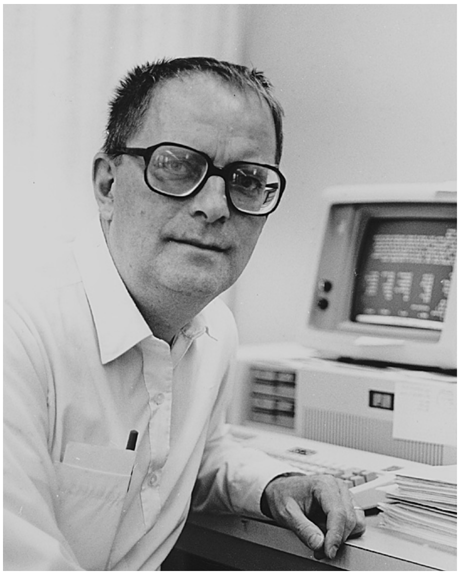
Bohdan Paczyński 先生の思い出

住　貴宏（名古屋大学太陽地球環境研究所）
e-mail: sumi@stelab.nagoya-u.ac.jp

Bohdan Paczyński 氏の訃報は，突然プリンストンの友人から，つづいて学部長の David Spergel 氏からも届いた．病状を知っていた私は，ある程度覚悟はできていたつもりだったが，やはり辛い．彼に影響を受けた多くの人が彼の死を惜しんでいることだろう．そのなかの一人である私がこの紙面を借りて Paczyński 氏の思い出を記したいと思う．呼びなれた『Bohdan』と書く失礼をお許しいただきたい．

私は 2002 年 4 月から 4 年間，プリンストン大学天体物理学部で PD として Bohdan と研究をする機会に恵まれた．私は重力マイクロレンズを専門としており，プリンストンは，ポーランド–アメリカ共同のマイクロレンズ探査グループ OGLE のアメリカの拠点である．最後の 1 年は主に Spergel 氏らと次期位置天文衛星 SIM のプロジェクトにかかわっていたが，不自由な Bohdan をオフィスまで送り迎えするときにいろいろと議論をするのが楽しみの一つであった．

Bohdan はさまざまな分野で有名であるが，特に私が専門としている重力マイクロレンズの分野は彼のアイデアから生まれ，神のような存在であった．彼なしでは，この分野すら存在しないわけだから私は今頃何をしていただろうと考えさせられる．実はこの原稿を執筆中もニュージーランドでマイクロレンズの観測中である．そんな“神”と初めて会うときは非常に緊張していたが，当時地下にあった私のオフィスに自ら出向いてくださり，ポーリッシュなまりの英語で気さくに話かけてくださった．私のつたない英語を嫌な顔一つせず熱心に聞いてくれたのがとても印象的で，以後もその熱心な話しぶり聞きぶりは一度も変わらなかった．その後，私の博士論文を丁寧に読んでいただき，いろいろ議論をしたり褒めていただいたのがとても記憶に残っている．よく考えると 4 年



Bohdan Paczyński (1940–2007)，撮影 R. P. Matthews

間，Bohdan から一度もネガティブなことを言われたことがない．“ここは良いけど，こうしたらもっと良いんじゃいか？”そうすると結局確かにうまくいってしまっていた．人を褒めて育てる人のようだ．なので Bohdan からプレッシャーを感じることは全くなかった．しかし，同じく Bohdan の元で研究していた Laurent Eyer 氏は，Bohdan は “an iron hand in a velvet glove” だと言う．確かに毎日のように，どうなった？ と聞きにきた．Laurent にはそう映ったのかもしれないが，私にはただ好奇心が強い少年のように映った．ただそれに応えようとつい必死で働いてしまっていたのだが．

そんな人柄と才能のためか Bohdan にはいつも人が集まる．来客，院生，ポスドク．プリンストンの院生は，最初の 2 年間は半年に一度指導教官とテーマを自由に変えて論文を書き，残り 2 年で博士論文を書く．当然 Bohdan は人気のある教官

の一人であった．彼と議論をするためにオフィスまで行っても，誰かと議論中で，少し間を置いて行くとまた他の誰かと喋っているということが何度もあった．さながら，“行列のできる○○○”である．Bohdan の人柄を表すエピソードとしては，戸谷氏の稿にある GRB が銀河内か外かの論争のおまけがある．当時同じ学部にいた Martin Schwarzschild 氏は銀河系内派であった．ある日議論の末に Schwarzschild 氏は Bohdan に賭けを申し出た．しかし，Bohdan は賭け事が嫌いで賭けに乗らなかった．その後皆は，アインシュタインが宇宙項を導入したことを人生最大の過ち “the biggest blunder” と言ったのにちなんで，Schwarzschild 氏の “biggest blunder” は銀河系内に賭けようとしたことだが，Bohdan の “biggest blunder” はその賭けに乗らなかったことだと笑ったそうだ．

彼は，喋りながら“ひらめく”ことが多いそうだ．戸谷氏の稿にあるモーニングコーヒーのときや，学生への講義中に突然ひらめくそうだ．とにかくよく喋る．コーヒーの時間も十数人いる中で半分以上は Bohdan が喋っていた．論文中でコーヒーのメンバーに謝辞を書くほどだ．私と喋るときは 8 割くらい喋っていたように思う．喋りながら突然何かを思い付き，話がそれる．そして何時もシャツの胸ポケットには，ビスケットが数枚忍ばせてあり，それを頬張りながら嬉しそうに“オーマイグッドネス！”（Bohdan の口癖）を連発していたのを今でも思い出す．

Bohdan の凄さは，その天才的なアイデアだけではなく，人を動かす力である．彼との共同研究はもちろん，彼の仲介で他の人たちの共同研究が生まれ大きな業績となることが多々あった．例えば変光天体を検出するのに今では有名なイメージサブトラクション法というアルゴリズムがある．これは，Alard と Lupton が Bohdan によって引き合わされ，初めて生まれた．Bohdan の助言で OGLE が生まれ大成功をおさめており，最近は ASAS という全天変光天体サーベイが立ち上がった．これは，ガンマ線のトリガーなしで GRB のオプティカルフラッシュ，残光を観測，さらには全く未知の変光天体を発見しようという野心的なものである．決して大きなプロジェクトではない．小さいのにこんなにできるというところが Bohdan の真骨頂であった．

Bohdan は変光するものが大好きで，亡くなる直前にもそう言っておられた．変光星，マイクロレンズ，GRB. 業績の多くがそうである．ドアには数百もの変光星の光度曲線の書かれたポスターが貼ってあった．時には OGLE によって撮られた数千もの光度曲線を自分の目で見て新天体を探すこともあった．今時はアルゴリズムを組んで変光星の検出選別を行うが，Bohdan いわく，“アルゴリズムでは未知の天体は見つからない”．確かにそのとおり．新発見でなくても楽しいそうだ．それでも，実際にいくつかの新発見をするから，“オーマイグッドネス”である．私が故 John Bahcall 氏と仕事をした折に，John も実際の星のイメージを自分の目で確認するから準備してくれ，とおっしゃった．偉大な方々が，あの歳になっても自分で“力”仕事をするのを見て驚きと身の引き締まる思いをした．

今年の 1 月にプリンストンを訪れる機会があり，自宅療養中の Bohdan を訪ねた．寝たきりのはずの Bohdan が起き上がって車いすに自分で載ったと奥さんが驚いていた．喋るのも困難なほどに衰弱しておられたが，私が研究成果を見せると“オーマイグッドネス！”と目を輝かせていた．これが私にとって最後の Bohdan の “オーマイグッドネス” だった．Bohdan の没後プリンストン時代の友人たちとメールのやり取りをした．私が，“プリンストンの父を亡くしたようだ”と送ると皆納得し，“でも Bohndan が父なら俺たちは家族で，俺たちはまだこうして生きてるぞ”，と励まされた．Bohdan から大きな遺産をもらった気がした．どうぞ安らかにお眠りください．